〈授業報告〉社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）

授業概要の概要

国際連合（国連）の「持続可能な開発目標」（SDGs）は世界的なトレンドとなっており、その一つとしてジェンダー分野が掲げられている。世界的にも #MeToo 運動がおこり、ジェンダー＆セクシュアリティに関わる問題に学生たちの関心も高まっている。

そうした中で、社会科学部ではジェンダー関連の授業が姿を消していたことを憂慮した教員が、2022 年度春学期に、3 年生以上を対象にした「社会科学総合研究（ジェンダーとセクシュアリティ）」という授業を立ち上げた。EU（ヨーロッパ連合）ではすべての政策にジェンダーの視点を取り入れるジェンダー主流化という考え方があることから、ジェンダーを必ずしも専門としていない教員たちが、それぞれの専門領域においてジェンダー＆セクシュアリティの課題と取り組みについて事例を上げた授業を構成している。

社会思想（寺尾範野准教授）、人権法（谷口真由美講師）、社会学（島﨑裕子准教授）、人口学（小島宏教授）、国際関係（堀芳江教授）、戦後の映像からみる日本（佐藤洋一教授）、ヨーロッパの政治社会（鈴木規子教授）、国連の教育政策（菅野琴講師）、企業におけるダイバーシティ（趙有希教授）など、社会科学の多様なアプローチからジェンダー＆セクシュアリティに関する基礎的な知識を身につけ、多様な課題についてジェンダー＆セクシュアリティを絡めて考えられるように学生たちに求めた。

また、「社会科学総合研究」の名にふさわしく、学生たちは 6 月に教室の外に出て、ジェンダー＆セクシュアリティに関連するフィールド調査を行った。学生にはフィールドへ行った証拠として写真や資料を掲載し、フィールド報告書を作成した。こうした経験をもとに、期末には他のメンバーとグループワークを通して、ジェンダー＆セクシュアリティについて課題研究発表を行った。

以下では、履修者 60 名のフィールドワーク・レポートの中から、6 名の学生たちの力作を選んで紹介する。

服装におけるジェンダー規範：その過去と現在を見据える

美和　哲平

本稿は、聖心女子大学グローバル共生研究所主催「企画展 いま、女性はどう生きるか キャリア、結婚、装い、命 第Ⅲ期 美か束縛か 纏足・コルセットの歴史と #KuToo 運動」を 2022 年 6 月 25 日（土）に訪問した際のフィールドワークレポートである。

以下では、本展の意図と展示の概要について述べた上で、本店の意義を明確化し、服装におけるジェンダー規範の解体に何が必要かを検討する。

本展は、歴史上女性ジェンダーに割り振られてきた「装い」に関する規範を瞥見することを通し、現代においても同様の規範が存在しており、それに対し異議申し立てがなされていることを確認した上で、個人が個人の選好に基づいて服装を決定できるような社会はいかにして構想可能かを考える、という主旨のものである。展示は 3 つの部分からなっており、「Chapter 1」が中国の「纏足」の歴史について、「Chapter 2」がイギリスの「コルセット」の歴史について、「Chapter 3」が日本で 2019 年に巻き起こった「#KuToo 運動」について取り上げたものになっている。それぞれの部分について概要を述べ、本展が何を示そうとしているのかについて検討する。

写真 1　企画展会場入口の掲示

「Chapter 1」は、中国において 13 世紀から 20 世紀にかけ存在していた「纏足」の風習を取り上げた展示となっていた。同部分の展示について概説する。纏足とは、中国の女性が幼少期（5 ～ 8 歳頃）から足を縛り上げ、本来成長する足のサイズより小さくなるように変形させる風習のことである。なぜこのような風習が存在していたのであろうか。本展では、それを美の基準が何よりも「足のサイズ」に求められ、女性の足のサイズがその女性の人生を左右するものであったことに求めている。当時の中国では足の小さい女性（理想のサイズはおよそ 10cm 弱とされた）こそが魅力的であるとされており、嫁ぎ先を決定する非常に重要な要素であった。また当時の女性の人生は嫁ぎ先の経済力によって左右されるものであったため、纏足は当時の女性にとって自らの命運を決する行為であった。

纏足は社会における家父長制を色濃く反映する風習であったが、しかし娘に纏足を行わせる役割を担ったのは一家の母親で

あった。母親は娘が纏足への憧れを持つように早くから纏足の魅力を説き、娘が纏足を始めると、娘が痛がったとしても母親は決して纏足を緩めることはなかった。

このようにして行われる纏足は足を無理に変形させるものであるから、当然それを行う者の健康を害することとなる。展示では、纏足により「すり足」でしか歩けなくなった女性の脚の筋肉が萎縮し、最終的に支えなしには歩けなくなってしまったという被害が紹介されていた。

纏足の風習は、19 世紀から 20 世紀にかけ纏足廃止のための運動（「天足運動」）や日中戦争の影響もあり、次第に廃れていくこととなった。

次に、「Chapter 2」の「コルセット」に関する展示について概説する。「コルセット」とは、女性用下着の一種であり、主に腰回りの体型を整えるために使用された。展示では、特にその利用が顕著であったとされる 1870 ～ 80 年代のイギリスの事例について取り上げられていた。

当時のイギリスにおいてはコルセットによって得られる「ウエストの細さ」は「女性らしさ」の象徴であり、また男性にとって性的魅力として見なされる対象であった（理想とされたウエストは 42.5 ～ 45cm とされた）。こうした事情から、主に上流階級の女性が、良い結婚相手を得るために競ってコルセットを用い、ウエストの細さを追求した。また当時のイギリスは経済不況にあり、それも「結婚相手の確保による経済的安定の獲得」という目的によるコルセット利用を加速させた。

写真２　纏足に利用された靴

硬質な素材によって製作されるコルセットを用いて無理にウエストを細くすることは、纏足同様コルセットを使用する女性の健康に害をもたらすこととなる。具体的には骨格の歪み、頭痛、食欲不振、呼吸困難などが生じる。しかしこうした害が医師たちの手によって報告されながらも、腰の細さに美を見出す価値観は女性によっても内面化されていたため、コルセットの利用は止むことがなかったとされる。

19 世紀後半になるとコルセットのもたらす害がより注目されるようになり、女性たち自身によってコルセットの利用を止める運動（「服装改革運動」）が生じ、機能的で日常の利用に適した衣服を着用する動きが高まっていった。

最後に、「Chapter 3」の「#KuToo 運動」についての展示について概説する。この運動は、女性に対するパンプス・ハイヒールの着用を義務づける企業の規則に疑義を呈する 2019 年の石川優実によるツイートに端を発し、女性の性被害を告発する「#MeToo 運動」にちなんで名付けられた。この運動は一部の企業に女性のヒール着用義務の規

定を撤廃させるなど一定の成果を見せた。

以上本展の展示内容についてその概要を述べてきたが、そこから考えられる本展の意義とは何であろうか。まず挙げられるのは、纏足やコルセットと現代の「#KuToo」を同列に並べ展示することで、しばしば歴史的なこととして忘却されがちな女性への服装に関するジェンダー・バイアスが極めてアクチュアルなものであるということを提示していることであろう。歴史を通じて女性は服装に関する規範に苦しめられてきたのであり、それゆえ「#KuToo」運動の示した社会的不公正が重大な問題であるということを示すことに成功しているように思う。

また、本展によって示される歴史的事象と現代の女性へのヒール着用の義務付けに多くの共通点が見られるのも興味深い。

こうした観点から重要であるのは、女性たちを抑圧する美への規範がその社会の家父長制によって生成し維持されていることである。纏足やコルセットは男性による女性への美的「審査」をパスするためのツールとなり、婚姻を通じた男性による扶養、つまり経済的安定の獲得に結びつく。このような形で女性が自らの身体の統制によって男性に依存せざるをえない構造が再生産されていく。一方のヒールは直接に婚姻とは関連しないが、男性中心の職場において女性が承認されるためのツールとして機能している。纏足やコルセット同様それ自体では不合理な規範により、女性は労働市場に参画を許されるのである。こうした意味では、労働市場への包摂というネオリベラルな秩序に起因するという点で、ヒール着用義務と纏足・コルセットとの差異を認めることもできるだろう。

とはいえ、以上に述べたような「男性によって女性が抑圧されている」という単純な構図を問題の把握に利用することはできないという点も通歴史的な共通点である。纏足を娘に課したのはその母親であり、コルセットの利用は当の女性たちが内面化した美の規範に則り「自発的」に行われた側面がある。ヒール着用義務についても、運動の口火を切った石川優実（2019: 7）は、最初にその義務について疑義を呈した際に友人の女性から言われた「差別の仕返しではないか」という言葉をかけられたエピソードを紹介している。いずれも女性自身が女性差別的な価値観を肯定してしまう（せざるをえなくなる）ことの問題を露わにしている。

本展の展示内容は、以上のように歴史的事象と現代の問題を比較し、その思わぬ共通点を見つけ出すための助力として機能していると言えよう。

以上に本展の意義を検討してきたが、それでは現代において未だ残る服装に関するジェンダー規範を解体するためには何が必要なのであろうか。最後にこの点について考え、稿を閉じる。

本展の内容からその解を引き出すとすれば、「まず歴史を知ること」が必要であると言うことができるだろう。歴史は、とりもなおさず現代を映し出す「鏡」として機能

する。歴史の検討によって浮かび上がる問題の共通点と差異は、現在の問題がどのような社会構造に裏打ちされたものであるのかを明らかにする。それは問題解決のための糸口となるであろう。

現代においても、服装・美容に関するジェンダー規範は未だ残存している。わかりやすい例は「化粧」に関するダブル・スタンダードであろう（最も、現在では男性に対しても「化粧せよ」との圧力は強まっているが）。本展は、こうした諸問題についてその歴史を検討することの重要性を示唆しているという点において、大きな実践的意義を有していると言える。そうした本展の意義を活かすことができるかは、本展を鑑賞した者たち（筆者自身も含めて）にかかっているように思う。

＊本稿に使用した写真は、全て筆者によって撮影されたものである。

参考文献

石川優実（2019）『#KuToo 靴から考える本気のフェミニズム』現代書館.

美容業界のジェンダーレス化

黄瀬　　志

私は今回ジェンダーレス化の取り組みを自分の目で実感したく、高田馬場のBIGBOX内のLoft化粧品コーナーに足を運んだ。私が中でも化粧品に注目した理由は、近年急速に進む美容業界のジェンダーレス化について興味があったからだ。TVCMで人気男性俳優を起用しているのを見たことがある。最近では電車の広告でも見かけることが増えた。正直なところ、この講義を受講するまでは「何故女性ではなく男性を起用しているんだろう」「男子がリップなんて気持ち悪い」と思っていた節はあった。しかし今では男性を起用することのメリットや意義を十分に理解できる。フィールドワークで発見したことや考えたことを基に本稿では述べていきたいと思う。

男性の広告を求めてLoftの化粧品コーナーに足を運んだ。率直な感想として、自分が思っていたより実際はジェンダーレスが進んでいないと感じた。化粧品コーナーには約20ヶ所に広告が貼られていたがその中で男性を起用した広告は1ヶ所だけであった。男性の広告が少ない理由として考えられることは、依然として、化粧品は女性がするものという考え方が我々の中にこびり付いているからだと考えられる。結論

から述べると、もっと男性を広告で起用すべきだと今回実際に足を運んでみて感じた。

どのような意図で男性を化粧品の広告で起用するのか、日本ビューティインダストリー協会の代表理事である瀬戸麻実は2パターンを示している（参考文献1）。

①「“女性を応援する”目線で男性がコスメに関わるパターン」

②「対男性のコミュニケーション」である。

①については、松嶋菜々子や松雪泰子や伊東美咲などといった、全女性が憧れるといっても過言ではない美しさの際立つ女性タレントが起用された広告が枢要だった。しかし男性を起用することで“綺麗な女性”に左右されずコスメ商品そのものに目を向けることができる。

②については、男性のメイクも徐々に受け入れられる世の中になってきた。実際

人気男性俳優を起用した実際の化粧品売り場

THREE や NARS でも横浜流星や吉沢亮といった人気男性俳優を起用している。これらの広告には「男性も化粧をしてもよい」という啓蒙の役割がある。瀬戸が記事内で話している①②により、ジェンダーレス化の動きはこれらのメリットも含意することを理解することができた。

ジェンダーレス化の取り組みを自分の目で実感したく、Loft 化粧品コーナーに足を運んだが、実際男性は想像以上に起用されていなくて、“ジェンダーレス”と最近よく耳にするものの、蓋を開けてみれば、あまり実現されていなくて、残念な結果であった。

今回は美容業界のジェンダーレス化について調べてみたが、これを機に多方面からのジェンダー問題への取り組みを実際に調べてみたいと感じた。これからも男性、女性、その他のジェンダーの人々が生活しやすい世の中とは何か、自問自答して考えて生活していきたい。

参考文献

1　ORICON NEWS「急速に進む美容業界のジェンダーレス化、吉沢亮に横浜流星…コスメ広告に“男性”を起用することの有用性」https://www.oricon.co.jp/special/55112/（閲覧日 2022/6/24）

ボテロ展
～性の重要性と美の定義～

増田　柚香

私たち日本社会は、ある一定の「美」という定義を共有している。そして、その社会が期待する「美」に応えようとして、「美白」、「ダイエット」という言葉に反応し、それらを追求する。しかし、本当に「美」は白くて細身の女性だけを指すのであろうか。なぜ私たちは固定された美という概念に縛られるのだろうか。その概念を破ったのが、コロンビア出身の画家、フェルナンド・ボテロである。私は今回のフィールドワークで、渋谷で開催されている『ボテロ展　ふくよかな魔法』を訪れた。

ジェンダーとセクシュアリティという授業のフィールドワークで、『ボテロ展　ふくよかな魔法』を選んだのには二つの理由がある。一つ目は、私は、元々女性は痩せている方が綺麗という考えに疑問を抱いていたからである。インスタグラムをはじめとするSNSでは、理想体重やダイエットについての投稿が毎日されている。しかし、ボテロは逆にふくよかこそ美とし、自分の作品の人物を全員ふくよかに描いた。確かに、コロンビアと日本という文化の違いはあるかもしれない。しかし、細身こそが美しいという世界で一般的な概念にとらわれていないことは事実だ。そんな彼の作品を実際に見てみたいと考えた。二つ目の理由は、彼の作品に登場する人々は全員中性的であると感じたからだ。彼の作品はぱっと見男性か女性か分からない人物が描かれている。古典的な絵画であると、女性と男性はそれぞれの性が誇張されて描かれているため、一眼で誰がどちらの性かが分かる。しかし、彼の作品では識別がつかないのだ。それをとても興味深いと感じた。

今回この展覧会にいって、ジェンダーは人間を認識する上で重要でない場合もあるということを発見した。上記で述べたように、彼の作品の人々は中性的であまり性別の判断がつかない。しかし、描かれている

フェルナンド・ボテロ《アングルによるモワテシエ夫人にならって》2010年。アングルの『座るモワテシエ夫人』をモデルとした作品。原作は美しい写真が描かれているが、ボテロによるものは短髪で胸毛が生えていたりと、どちらの性別か一眼では分かりづらくなっている。

人がどのような人なのか、どこで何をしているのかははっきりと分かる。そのことから、ボテロにとって人間を描くときに性はあまり重要ではないのではないかと考えた。そして、これは社会のあるべき姿なのではないだろうか。現代社会では、まず相手が女性か男性かを判断し、それによって対応を変える。しかし、私たちが本来見るべきことは、その人の能力や特徴である。ボテロはそれを伝えているのではないかと考えた。

もう一つ発見したことがある。それは、女性の美は社会的に作られたものということである。社会では女性は痩せていると綺麗と言われているが、今回ボテロの作品を見て、必ずしもそうではないということ実感した。なぜなら、彼の作品には痩せた女性は誰１人出てこないが、どの人物も美しく描かれているからだ。つまり、痩せているのが「美」というのは、私たちが作り出したジェンダー観であることが分かる。これは社会的に作られたジェンダーの一例にすぎないが、私たちは常に社会によって作られた期待に応えようと努めながら生活をしていることを改めて感じた。

今回の「ボテロ展　ふくよかな魔法」を通して、ジェンダーがいかに社会的なものであるかを実感することができた。そんな社会的な固定観念や、期待を覆したボテロは非常に先駆的である。そして、社会全体がボテロのように、人を性ではなく中身で判別するようになることを願う。

参考文献

Bunkamura.「ボテロ展　ふくよかな魔法」. ボテロ展ふくよかな魔法. https://www.bunkamura.co.jp/ museum/exhibition/22_botero/,（2022 年 6 月 27 日閲覧）

女性参政権のさらなる拡大に向けた考察
―市川房枝の婦選活動とその教訓から―

石割　竜成

私は、日本における女性の政治参加が他の先進国に比べて大きく出遅れていることへの危惧から、その解決策の思案に向けた知識を蓄積する目的で、東京都渋谷区にある「市川房枝記念会 女性と政治センター」に足を運んだ。この場所は通称「婦選会館」（写真1）と呼ばれ、日本女性参政権獲得に向けて「婦選活動」に尽力した元参議院議員の市川房枝の名が付けられている。この記念館を訪れたことで、日本において女性が政治に参加する権利を獲得するまでの苦難の歴史を理解し、そして、女性参政権の重要性と今後いかに女性の政治参加を拡大していくかについて検討する上での大きなヒントを得ることができた。

写真1　市川房枝記念会女性と政治センター

市川房枝が活動を始めた大正時代は、政治は男の仕事、女は家で家事をして子どもの面倒を見る、こうした性役割が当たり前だとすり込まれていた。しかし、女の仕事とされているような家事、育児と政治とは関係が深く、切り離して考えることなど出来ない分野だと彼女は述べていた。例えば、町中のゴミの始末ができていなければ、いくら家を綺麗に掃除したとしてもハエや悪臭の問題は解決しない。また、せっかく良い子を育てても、近くに芸者屋があれば風紀は乱れて、子どもがグレてしまうこともある。このような地域の環境を変えるためには、女性が政治に参加して女性側の意見を法律に反映する必要があるのだ。市川が「男だけで政策を決定すると、女や子どものことが分からないために、つい不利な法律を作ってしまう」と述べるように、女性も男性と一緒に法律を作る体制を整えるべきである。

では、具体的にどのような権利が女性の政治参加を促すために求められているのか。現在、彼女の活動の賜物として、制度上は参政権の男女平等が認められている。しかし、日本における女性の政治参加の割合は依然として低いと言える。投票率に関しては、男女でそこまでの開きがないものの、立候補の割合ではその差が大きい。これは、政治は男性が行うものというステレオタイプが、市川房枝の生きていた時代と大して変化していないことが原因であろう。「婦人が政治に関わると、家庭から飛び出して家事がおろそかになることは、いかがなものか。婦人が外で演説していると、家では子

どもがお乳をほしがって泣いている」。こうした言説に対して、市川は婦人が参政権を手に入れるまでにはこのような批判がどの国でも繰り返されてきたことを示しつつ、婦人が政治に参加することは、婦人を家庭から追い出し、育児・家事をしなくなるわけではないと付け加えた。彼女は「国・都道府県・市町村というものを家庭の延長、大きな家庭と見ることで、今まで欠けていた女らしさを政治に付与する」と述べ、今まで女性の目が行き届いていなかった分野に対して、女性の意見が新しい価値観をもたらすと主張し、結果的にそれが日本の成長につながると結論づけた。

ただ女の人が座り込んでいるだけではその権利は獲得できない。どうしても欲しいという人が立ち上がって、運動をしなくてはならない。運動するといっても、先頭に立つ必要は無い。それは出来る人に任せて、台所からでもいいから、女性候補者を応援する声を上げ続け、政治への関心を忘れないこと。その姿勢を間近で見る子どもたちがやがて大人になれば、自然と政治への関心を持ち、その中には女性候補者も出てくるだろうと言うのだ。つまり、彼女の名言としても有名な、「権利の上に眠るな」という姿勢こそが、今後の女性の政治参加に求められていくことだろう。

そして、男性側もただ指を咥えてその運動を傍観しているのではなく、女性の政治参加に向けた動きを前向きに受け入れながら、クオータ制のように、強制力を持った男女同数政治を強く推進していくべきなのだ。そうすることで、現在の少子高齢社会の限界や、経済成長の滞りを見せる日本の現状に対して、新たな選択肢を見出すことができると私は確信している。

写真２　センター内の展示室

このように、国全体を大きな家族と捉え、女性・子どもの意見を取り入れるべきだとする彼女の主張には、大きな共同体意識を持った集団が、日々の生活において他者との関係なしには成り立たないことを我々に認識させてくれる。そしてこれは、ジェンダー・セクシュアリティの違いがあれども、多様性社会の中で個人の生活が様々な人によって支えられていることを示している。だからこそ、すべての人が平等に権利を有していることを強く主張し、誰かの不利益になるような制度と偏見は改善していくように積極的に推し進めていくべきであることを彼女は教えてくれた。マイノリティの権利を実現していくために、今後も彼女の勇気ある行動を見本としながら、不当な公権力からの圧力に立ち向かう粘り強い姿勢を忘れないでいきたい。

参考文献

進藤久美子（2011）「準戦時体制下の市川房枝―日本型ジェンダー・ポリティックスの創生」『現

代史研究』第7号 東洋英和女学院大学現代史研究所 pp.41-98
久保公子（2020）「女性が民主的ガバナンスの積極的担い手になるために 市川房枝記念会女性と政治センター事業」『NWEC 実践研究』10 pp.107-126
小笠原眞（2009）「市川房枝―生涯を男女平等等の実現に賭けた婦選運動家・政治家―」『愛知学院大学文学部紀要』38 pp.11-26

「らしさ」を押し付ける現代社会―プライドハウス東京レガシーフィールドワークレポート―

寺本　美紀

背景

2022年5月17日に行われたセミナー「トランスジェンダー排除にどう対応するか～大学、メディア、当事者・支援者の視点から考える～」に参加した際、プライドハウス東京がセミナー主催者であったことや、授業のグループワークのテーマが「セクシュアリティと教育」であり自分の担当箇所がLGBTQ＋の教育であることから、セクシュアル・マイノリティに関する情報発信やイベント、コンテンツ開催や居場所提供として日本初の常設総合LGBTQ＋センターである『プライドハウス東京レガシー』が

新宿御苑のすぐ近くにある入り口。階段はプログレス・プライド・フラッグの11色で塗装されている。

フィールドワークを行う場所として最も適した場所であると考えた。よって6月11日新宿区にあるプライドハウス東京レガシーを訪れた。

プライドハウス東京の概要（プライドハウス東京 2022 公式ガイドブックから引用）

「東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会開催を契機に、セクターを超えた団体・個人・企業・大使館が連結して立ち上げたコレクティブ・インパクト型のプロジェクト」。すべての人が、性のあり方によって取り残されることなく、平等に、健やかに生きられる社会づくりに貢献し、さまざまな分断を超えるための希望と経験を創出することをミッションを唱え、LGBTQ＋＆アライのコミュニティが、さまざまな制約を超えて、安心してつながり、互いに活力を得て、より良い暮らしに向けて多様なステークホルダーと協働できる、持続可能な場づくりを目指すというビジョンを掲げている。ともに学ぶ、ともに支える、ともに動くという 3 つの価値をもとに活動しており、プライドハウス東京レガシーは 3 つの価値を提供する活動拠点となっている。

プライドハウス東京レガシーで学んだこと

館内にはアーカイブ＆ライブラリーコーナーなど無数の書籍が用意されており、ジャンルも様々でまさに性に関する知識を網羅できそうな空間だった。また、スタッフの方が数名おり、私が行った日には代表の松中権さんもいらっしゃった。気軽に質問して良いとおっしゃっていただけたので性的マイノリティのメディアでの取り上げられ方や現状の人々の理解についてどう思っているのかを尋ねてみた。

プライドハウス東京レガシーの中。無料でドリンク提供も行っている。訪れた際にはメインフロアで読書をしている人やスタッフと会話している人がいた。

松中さん：認知度が広がり LGBT や性的マイノリティという存在が馴染みのあるものになっていくのはとても良いことだと思います。ただ、全体像を把握しようとするあまり「らしさ」の押し付けが起こっているのも事実です。日本にいる全ての人が一度は女らしさ、男らしさを求められたことがあるように、メディアの取り上げ方によって LGBTQ＋もまた性的マイノリティ「らしさ」に苦しめられることがあります。結局は誰もが自分の生きたいように生きさせてもらえるのが一番ですよね。

松中さんとお話をする中で確かに自分もどこかで性的マイノリティのイメージ像というのを持っていたかもしれないということに気付かされた。帰りにいただいた「ト

プライドハウス東京が発行している冊子の数々。その他にもLGBTQ関連団体のリーフレットやイベント等の各種フライヤーが全て無料で配布されている。プライドハウス東京が制作したハンドブックは公式サイトでも閲覧することができる。

ランスジェンダーのリアル」という冊子の中には、女性として生まれたことに違和感を感じたけど男性らしくしたいわけでもなかったノンバイナリーの方、女性性をとことん極めたいMtFの方、ろう者でゲイだけど男らしさを求められるゲイコミュニティには合わずノンバイナリーとして生きている方など、メディアで取り上げられるようなイメージ通りの性的マイノリティらしさはない人々のストーリーが書かれていた。

現代社会ではどのように生きていてもジェンダーの「らしさ」を押しつけられるようになっているというのが私が今回のフィールドワークを通して学び、発見したことである。

アーカイブ＆ライブラリーコーナー。LGBTQをはじめ、ジェンダー、セクシュアリティに関する学術書、実用書、小説、著名人の自伝、コミック、絵本、雑誌など多様な本が約600冊所蔵されている。

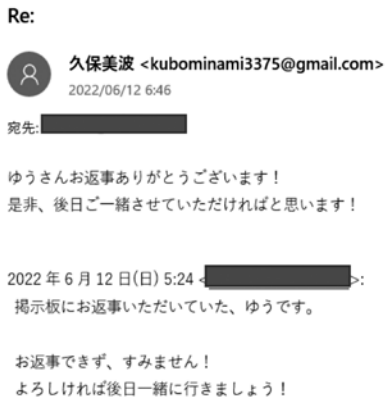
参考文献

プライドハウス東京（2022年4月）「プライドハウス東京2022公式ガイドブック」［パンフレット］プライドハウス東京

「トランスジェンダーのリアル」製作委員会（2021年9月）「トランスジェンダーのリアル」［パンフレット］プライドハウス東京

新宿二丁目を訪れて
―LGBT ブームの現代で当事者はなにを思う―

久保　美波


Re:

久保美波 <kubominami3375@gmail.com>
2022/06/12 6:46

宛先:[redacted]

ゆうさんお返事ありがとうございます！
是非、後日ご一緒させていただければと思います！

2022 年 6 月 12 日(日) 5:24 <[redacted]>:
掲示板にお返事いただいていた、ゆうです。

お返事できず、すみません！
よろしければ後日一緒に行きましょう！

写真 1

今回、フィールドワーク先に選んだ場所は「新宿二丁目」である。新宿二丁目は言わずもがな LGBT タウンとしての認識が一般的にある。筆者私自身も、その認識のもとジェンダーとセクシュアリティについて「フィールド」として考えた際に、真っ先に新宿二丁目が思いついた。筆者にとって、新宿二丁目は近寄りがたく、しかし非常に魅かれる部分もあった。折角のフィールドワークの機会ということで、新宿二丁目を訪れることに決めた。もちろん、初めての場所、未知の場所ということで、一人で訪れるのには非常に不安が多かったのでレズビアンサイトの掲示板を利用し、一緒に新宿二丁目に行ってくれる方を探し、その方に新宿二丁目の案内をお願いした（参照：写 1）。

本稿では、新宿二丁目を訪れ、出会えた LGBT 当事者の方と直接、話を交わし考えたことを分析していきたい。

普段、生活しているなかで LGBT 当事者に出会うことそして直接、話を交わす機会は生まれて一度もなかった。今回、LGBT 当事者の方と初めて話を交わすことができ、10 人弱の方に「同性婚」のトピックについてお話をお伺いすることができた。

メディアの報道のされ方では社会的には同性婚が進められていたり、マイノリティに優しい社会としての LGBT 法案が昨今のトレンドとしてある。そういった中で実際に、同性婚について伺ったところほとんどの方が、同性婚を合法化・制度化してほしいという世間の声と乖離がない言葉を聞くことができた［1］。法律で内包されていない家族では、病院の診察、相続、賃貸の契約時等に諸問題が発生するということが多いようだ。

一方で数名の方からは「マイノリティの代表として、LGBT が扱われていることに不快感が生じる」や「政治家の票稼ぎの道具になっているように感じる」という意見を伺うことができ印象的であった。確かに昨今、マイノリティの代表として LGBT が注目されているように感じる。そして、選挙で当選するための票獲得だけのために公約を掲げている政治家も存在するとも感じる。

お話をお伺いする中で筆者が感じたことは、本質的な問題を理解し、そしてその問題解決の為の「同性婚推進」でないと、当事者としては便宜的に利用されている、選挙で当選するだけのための政治利用だと感じてしまうのは、当然だと考える。政治家だけでなく企業やLGBT当事者でないマジョリティとされている多くの人にも言えることだとも感じる。三橋（2017）は「人権という基本に立ち返ることの大切さ」を述べている［2］。企業や政治でのLGBTの扱われ方について、自己の利益や利得とも思われる表面上の問題でなく、本質的な部分である当事者、ひいては個人の人権に立ちもどった視点が肝要であると考える。

新宿二丁目に訪れたことで複数のLGBT当事者の方と「同性婚」についてお話をお伺いすることができた。LGBTブームといえる現代で、本質的な個人の人権の問題であるということを念頭に置くことが肝要であると考えることができた。最終的には、こういった問題を考えるうえで、LGBT等のマイノリティとされる人々の選択肢を増やすことができるような社会の仕組みを進めていくように考えていきたい。

レファレンスリスト

［1］ NHKオンライン ホームページ『LGBT当事者アンケート調査～2,600人の声から～』https://www.nhk.or.jp/d-navi/link/lgbt/#hajime（アクセス2023/1/2）

［2］ HUFFPOSTホームページ『LGBTブームの課題とは？　三橋順子さんが指摘する光と影「人権より先に経済的側面が注目された」』https://www.uffingtonpost.jp/2017/04/25/junko-mitsuhashi_n_16222104.html（アクセス2023/1/2）

担当教員からの総評

美和報告は、身体を拘束することで美を強調する服装に関するジェンダー規範と、女性差別的な価値観に基づくステレオタイプを女性自身が肯定している問題点を指摘している。美に対するジェンダー規範は化粧にも表れるが、黄瀬報告では最近よく目にする男性の化粧品広告の実態について調査し、思っていたよりもジェンダーレス化が進んでいなかったと報告している。増田報告は、「痩せている女性」＝「美」というステレオタイプが、社会的に創られたものであることを発見した。さらに、男女の見分けがつかなくても美しく見えるボテロの絵画から、ジェンダーは人間を認識するうえで重要でない場合もある、と指摘している。この指摘は、政治への参加に対して市川房江が訴えたことに通じる。石割報告は、「政治は男がするもので、女は家事や育児」というステレオタイプに対して、「家事育児と政治は切り離せない」と反論して行われた婦選活動から教訓を導きだしている。しかし、残念ながら大正時代と今も大して変化していないと結論づけている。こうしたジェンダー規範に基づく「らしさ」の押しつけに窮屈な思いをしている当事者にヒアリングした報告もあった。寺本報告では、LGBTQ＋や性的マイノリティに対する認知が進む一方、メディアが作り上げたイメージによって当事者たちが苦しんでいることから、現代社会でも「らしさ」の押しつけから自由になれないことを見出した。久保報告では、新宿二丁目を訪れてLGBT当事

者に初めて出会い、同性婚についてインタヴューを行うなかで、同性婚の合法化が政治的に利用されていると不快に思う人もいることを知り、当事者の立場にたって人権の観点から問題の本質を捉える必要性を訴えている。

以上6本のフィールドワーク・レポートから、学生たちが現代社会におけるジェンダー＆セクシュアリティの問題を自ら探し出し、課題解決に向けて頭と心をつかって真摯に取り組んだことがよくわかった。それぞれ個性があって、学びの多い論文であった。

文責・編集：鈴木規子
編集・校正：佐藤洋一